

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

虚勢を張ってきた私が、
問題を起こし続ける生徒に
「君たちを信じる」と伝え、
まず自分が変われることを誓った

大阪府・私立箕面自由学園高校
大東範行

おおとう・のりゆき ● 同校に赴任して9年目。
地理歴史・公民科。世界の様々な問題について
探究する「グローバルリーダープログラム」などを通じた
国際理解教育に力を入れている。

30代半ばまでの私は、廊下ですれ違う生徒が身を硬くするような厳しい教師でした。厳しくする理由は曲がったことが嫌いな性格にありましたが、生徒になめられたくないといった思いも根底にはありました。そのため、校内での生徒の行動や容儀について厳しく指導し、生徒を管理する存在として虚勢を張っていたのです。

そんな私が、ある年の2年生のクラス担任を務めることになりました。そのクラスには、校則違反の常連の生徒も多く、実際に1年生の時に生徒指導で厳しく接した生徒が何人もいました。「あの子たちと毎日向き合うのか。これは一層厳しく接するしかない」。しかし私は、すぐに考え直しました。生徒たちは叱られても同じことを繰り返してきました。担任になった私がさらに厳しく接しても、溝が深まるだけではないか……。

担任としてのあり方を何日も考え、たどり着いた答えは、「自分が変わる事」でした。叱られてばかりの生徒たちは、承認欲求が満たされていないはずだ。私が彼らを信じ、味方になることで、彼らが変わるかもしれない。そう考えたのです。

始業式で担任が私だと知った生徒たちは悲鳴を上げました。クラス開きの時に戦々恐々としていた生徒に私は、「君たちのことを信じる」と言いました。保護者会でも、「子どもたちを信頼しましょう」と保護者にお願ひしました。

もちろん、校則違反を見逃すことはありませんでしたが、頭ごなしに叱ることはやめ、生徒の話を聞くようになりました。また、生徒をよく観察するようにもなりました。あのグループはいつもゲームの話で盛り上がっている、あの2人は最近仲よしだ……。そうした、今まで気にもしなかったことに目を向けるようになると、自然と生徒が話しかけてくるようになりました。

校内での私のクラスの評価は「騒がしい」から「明るい」に変わりました。不登校気味の生徒が毎日登校するようになると、同僚は「何があったの？」と驚きました。生徒になめられたくないといった私の気負いもなくなっていました。

私はそのクラスを2年間受け持ちました。難関大学に多くの生徒が合格したことはうれしかったですが、「大東先生のような教師になりたい」と、教職を志す生徒が現れたことも喜びでした。その生徒は今、同僚として私と同じ学校で働いています。

およそ20年前、鎧を脱いで生徒とかかわったことで、私は今も教師を続け、やりがいを感じることができています。

大東先生が指導のスタンスを変えることができた理由と、現在に至るまでの成長を、大東先生に憧れて教職の道に進んだ教え子の声を交えながら紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article30304/>